

アイヌの日光感精・卵生神話の起源をめぐって

瀬川拓郎（札幌大学）

『古事記』のアメノヒホコ伝説は、太陽によって女性が妊娠し（日光感精）、産んだ玉が王族などの始祖となる（卵生）大陸神話に由来し、朝鮮半島からの渡来人によってもたらされたとされる。この日光感精・卵生の伝説は九州の一部と南島に伝わるが、アイヌにも同モチーフの神話が認められる。アイヌのなかに日光感精・卵生の神話が孤立的に伝えられてきたのは、弥生・古墳時代に北海道へ往来し様々な文物や漁撈技術を伝えた九州北部の海民との交流をつうじた伝播とみられる。

1 渡来人伝説と日光感精・卵生神話

1-1 『古事記』応神天皇条のアメノヒホコ伝説

新羅のある沼のほとりで、身分の低い女が昼寝をしていたところ、日光が陰部にさして妊娠し、彼女は赤い玉を産んだ。ある男が、女からこの玉を入手し、物に包んでいつも腰につけていた。新羅の国王の子であるアメノヒホコが、男からこの玉を手に入れ、赤い玉は美しい乙女になった。アメノヒホコは彼女を妻としたが、いさかきをおこし、彼女は「私の祖先の国にいきます」といって日本に渡って難波に滞在した。アメノヒホコも彼女を追って日本へ渡ったが、難波に入ることが許されず、但馬国に停泊して地元の娘と結婚し、子どもをもうけた。アメノヒホコが新羅国から持参した宝は、二連の玉津宝、奥津鏡、辺津鏡、浪振るヒレ、浪切るヒレ、風振るヒレ、風切るヒレの八種である（要旨）。

1-2 朝鮮半島の始祖神話との関係

高句麗の始祖「朱蒙」の誕生譚では、扶余の王が連れ帰った娘を部屋のなかに幽閉していたところ、日光がさして娘が妊娠し、大きな卵を産み、その卵から朱蒙が生まれる（『三国遺事』巻一）。

1-3 日光感精・卵生神話の分布

- 日光感精神話** 蒙古、鮮卑、契丹、高句麗など北東アジア諸民族の始祖神話（三品 1971）。
- 卵生神話** 王や支配者の祖先が卵から生まれる。台湾、フィリピン、フィジー、インド、ミャンマーなど南アジアからインドネシアに分布。朝鮮半島でも新羅、伽耶など古代王朝の始祖伝承に多くみられる（三品同前）。

2 日本の日光感精・卵生神話

2-1 日光感精神話

九州の一部と南島で伝承。九州では鹿児島県霧島市の大隅正八幡宮の縁起譚、長崎県対馬の天道（天童）法師の出生譚の2例。大隅正八幡宮（和銅元年創建）の縁起では、中国の大王の姫が夢のなかで陽の光がさして身ごもり、王子を産む。王がこれを怪しみ、母子を船に乗せて海に流したところ、日本の大隅の海岸に漂着したとする（『惟賢比丘筆記』『神道集』）。対馬の『天道法師縁起』は、法師の母が太陽に向かって放尿したところ、日光に感じて身ごもり法師を産む。天道法師の母は大隅正八幡宮から正八幡神を氏神

に勧請した、あるいは彼女自身が正八幡神であったという大隅正八幡宮との関係が伝えられ、両者の日光感精神話はこの濃密な関係のなかで共有されてきたとみられる（福田 1992）。

南島では喜界島、奄美大島、徳之島、与論島、来間島、伊良部島、多良間島に広く分布。家のなかには娘が、便所に座っていて、あるいは庭で昼寝していて日光によって妊娠し、男あるいは女の子を産むという司祭や氏神などの出生譚。

南島の日光感精神話の、外に出ないで家のなかには娘が日光で妊娠したとするモチーフは、部屋のなかに幽閉していた娘が日光で妊娠したという高句麗の始祖神話のモチーフと一致。また、日光感精によって生まれた神の子が船に閉じ込められて海に流され、漂着地で司祭者になったと伝える奄美大島の説話は、船で流されるモチーフが大隅正八幡宮の縁起譚と一致（福田同前）。これはまた『日本書紀』垂仁天皇条にアメノヒホコが一人で小船に乗ってきたとあるのと関連。南島の日光感精神話は、九州を経由して伝わった朝鮮半島の神話を起源にもつか。

2-2 卵生神話

わずかに宮古諸島で伝承。日光感精神話と結びつくもの（福田同前）とすれば、九州や南島の日光感精神話にも本来は卵生のモチーフが含まれていたか。

3 アイヌの日光感精・卵生神話（瀬川 2017）

3-1 アイヌの日光感精・卵生神話

a 雲の神が、青空の神に嫁がせようとしていた娘が妊娠する。その相手がわからないというので、雲の神は娘を人間界に追放する。娘は、自分で建てた産屋で二つの糸玉を産む。娘はこの糸玉を錦に包んで大事にする。糸玉は二人の子どもになり、大きくなると手当たり次第獣を殺して食べるので、文化神アイヌラックルはこどもたちと戦うが、倒すことができない。このこどもたちは、日の神が雲の神の娘に一目惚れし、その思いが娘の体に入って妊娠し、生まれたものとわかる。アイヌラックルと子どもたちは兄弟になって助けあうことにし、子どもたちはアイヌの始祖になった（要旨：稲田ほか 1989 など）。

b 太陽の神がハルニレの女神が美しいのに感心し、ちらっとみたら女神が妊娠した（本田 2003）。

3-2 アイヌの卵生モチーフとアメノヒホコ伝説

b の神話で太陽の神によって妊娠させられたのはハルニレの女神。ハルニレはアイヌの樹皮衣の繊維原料。a の神話で糸玉から生まれた子どもたちと戦ったアイヌラックル神は、他のアイヌ神話ではハルニレの樹皮衣を着て登場する神で、この樹皮衣はかれを象徴する。娘が産んだ糸玉はハルニレ樹皮の糸玉。

さらにハルニレの樹皮衣は赤色であり、アイヌ神話でその色は炎に例えられる。物語のなかにアイヌラックル神という名前が出てこなくても、神が赤い樹皮衣を着ている、あるいは裾が焦げて炎が上がっているとあればアイヌラックル神とわかる（本田同前）。つまり女神が産んだ糸玉とは「赤い玉」にほかならない。

アイヌ神話は、日光感精と、娘が「赤い玉」を産むという卵生のモチーフが『古事記』のアメノヒホコ伝説と一致。

3-3 アイヌの日光感精・卵生神話の起源

縄文神話か 縄文時代に対外交流はほとんどない。もし旧石器時代に遡る古アジア集団の神話とすれば、日光感精・卵生はさらに色濃く日本の神話・伝説に形跡をとどめたのではないか（ただしアイヌの黄泉の国往還譚は、古アジア集団の神話に由来する可能性もある）。

北東アジア経由か 現在サハリン北部とアムール川下流域に暮らし、古代北海道のオホーツク人の末裔

とされる北東アジア先住民のニヅフの神話や伝説には、日光感精のモチーフが指摘されたことはない。

渡来人神話の伝播か その可能性が高いが、アイヌ神話では娘は「二つ」の糸玉（赤い玉）を産む。これはアメノヒホコ伝説のモチーフとは異なる。

『古事記』によれば、仲哀天皇は熊襲を討つため九州へおもむきそこで急死する。仲哀天皇に同行していた神功皇后は、妊娠中にもかかわらず新羅に遠征し、新羅の降伏後、筑紫に帰って応神天皇を産む。神功皇后は新羅遠征の際、臨月だったので、石を腰にはさんで出産を遅らせる。この石は筑紫国の伊斗村に残されているとある。神功皇后の伝説では、神功皇后の母はアメノヒホコの子孫のタカヌカヒメとされる。

この石については、筑前国風土記逸文の芋湄野条と、『万葉集』巻五、八一三・八一四番歌右注で取りあげられており、それは宝石のように美しい卵形の白い二つの石で、「皇子産みの石」として人びとに崇拝されているとある。この石のある地が「うみの」（芋湄野）や「こふのはら」（子負原）とよばれ、石が「皇子産みの石」とよばれていたことから、『古事記』の伝説の石は、子の出産を遅らせるものではなく、子の誕生にまつわるもの。さらに筑前国風土記逸文の怡土郡条は、この石が安置されている怡土では、同地の豪族である怡土県主について、その祖先は朝鮮半島の意呂山に天下った「ヒホコ」の末裔とする伝説が語られているとあり、この二つの石の伝説はアメノヒホコの異伝とみられる（板垣 1995）。

また『日本霊異記』には、美濃国方県郡の女が身ごもり、三年後の延暦元年に二つの石を産んだが、それは神の子であったという話が収められている。日光感精そのものについては触れられていないが、神の子である石を産んだという点で、この話にはアメノヒホコ伝説と同じ高句麗の始祖伝説の影響がうかがえる（南里 1989）。

アイヌ神話で娘が日光に感精して「二つ」の玉（卵）を産んだというモチーフは、このような本土の民間で伝承されていたアメノヒホコの異伝が伝わったことを示すか（※）。

※二つの石を神体とする神社は、厳島神社別宮とされる広島市安芸区瀬野の生石子神社（それぞれの石は大己貴命と少彦名命）や三次市の厳島神社などに、また常陸や能登などでも9世紀中頃、海岸などの石に大己貴命と少彦名命が顕現したとの伝承がある。石を子産石や神功皇后の鎮懐石として神体とする神社・伝説・民間信仰は全国各地に所在するが、以上の例では日光感精・卵生やアメノヒホコのモチーフ自体は伝承されておらず、日光感精と卵生を説くアイヌ伝説の起源はかなり古い時代にさかのぼる可能性が想定できる。

伝播の過程 日光感精・卵生伝説の伝承地は、筑前国怡土郡（現糸島市）のほか九州と南島であり、アメノヒホコが住みついたとされるのが兵庫県豊岡市出石という古代海民の一拠点であることから、アイヌへの伝説の伝播には、朝鮮半島と交流し南島へも往来していた西日本の古代海民がかかわっていた可能性がある。

弥生・古墳時代の北海道には長崎など北部九州の海民が往来しており、杵岐など北部九州や北陸の漁撈技術・漁撈具を統縄文集団に伝えたほか、かれらの持参した南島産貝製品や北陸産玉類などが同時期の北海道の墓から出土する。また礼文島浜中2遺跡では、弥生時代の北部九州海民に特徴的な3点セット（食用の弥生犬・クジラ骨製アワビオコシ／ヤス）が出土し、かれらは現地でアワビの採捕をおこなっていた。この海民はアイヌの祖先である統縄文集団だけでなく、古墳時代には道東のオホーツク人とも深く交流しており、オホーツク文化の遺跡では本州の海民に特徴的な角製有栓弭や直弧文を施した鹿角製刀剣装具などが出土する。弥生・古墳時代の北海道では北部九州を中心とする海民の往来・定住など活発な交流が認められる（道南を中心に統縄文人の形質がまだら状に和人化するのは海民の定住を示唆。ほかにもアイヌは海彦・山彦と同モチーフの神話などを伝承）。

その後アイヌと交流する本州集団は、秋田城での対国家交易か対東北部集団に限定され、西日本海民とアイヌの活発な交流は、中世以降の日本海交易の展開まで想定しがたい。さらに神話・伝説の伝播が本州集団の移住が前提になるとすれば、7～9世紀にかけての東北部集団の移住を除けば、弥生・古墳時代における西日本海民の移住以外にはない。縄文伝統を色濃く受け継ぐアイヌにおいて、日光感精神話が縄文起源でないとすれば、縄文時代における太陽信仰の問題についても考える手がかりとなりうるであろう。

- 板垣俊一 1995「渡来人の伝説—神功皇后鎮懐石伝説および天の日矛伝説と朝鮮シャーマニズム」『北東アジア地域の諸問題』県立新潟女子短期大学北東アジア地域研究会
- 稲田浩二・小澤俊夫 1989『日本昔話通観1』同朋舎出版
- 瀬川拓郎 2017『縄文の思想』講談社現代新書
- 南里みち子 1989「霊異記の成立事情」『語文研究』66・67
- 福田晃 1992『南島説話の研究』法政大学出版局
- 本田優子 2003「アイヌの生活文化」『平成十五年度普及啓発セミナー報告』アイヌ文化振興・研究推進機構
- 三品彰英 1971『神話と文化史—三品彰英論文集3』平凡社